

現代日本キリスト教文学全集 11 「日常と家庭」

著者

三浦朱門・三浦綾子・島尾敏雄
有吉佐和子・曾野綾子・遠藤周作

発行者 武藤富男

発行所 株式会社 教文館

一〇四・東京都中央区銀座四一五一
振替・東京一二三五七・電(五六二)八四四六

印刷所 伸光印刷株式会社

昭和四八年一月二〇日 初版発行

乱丁・落丁本はお取り替えます

© 1972

配給元 日キ版 東京都新宿区新小川町3-1 振替・東京60976
電話 (260) 5664 (代)
0393-625110-6100 (日キ版)

日常と家庭

現代日本キリスト教文学全集

11

教文館

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

箱庭	三浦朱門	五
羽音	三浦綾子	一五
帰巢者の憂鬱	島尾敏雄	二七
芽鱗	有吉佐和子	三〇
火と夕陽	曾野綾子	三七
四十歳の男	遠藤周作	四〇
解説	松原新一	五七

装
幀
熊
谷
博
人

箱

庭

三

浦

朱

門

第一部

I

ボタンという木戸のしまる音が、木俣^{マナブ}学の意識の闇の中にさし通って、

「ああ、修^スが出勤するんだな。」

と、眠ったまま考えた。次に、

「何もあんなに木戸を乱暴にしめなくなつて。」

と思うと、そのかすかな不満のために目がさめた。寝たまま、開け閉めできるようになっている、ベッドの脇の窓が明るかった。目をさましたのは、木戸の音もさることながら、この東向きの窓に雨戸を入れなかったためにちがいない。昨夜二時ごろ電気スタンドを消す時、外が暗かったので、雨戸のことをすっかり忘れたのだ。

学は窓の反対側にあるテーブルの上の腕時計をのぞい

た。まだ六時間も眠っていない。もう一度、眠りなおすべきかもしれない。

学は窓に背をむけて、毛布をかぶった。あと一時間ほど眠れたら、……。

すぐそばで鼻歌が聞こえた。窓の外、ほんの二三メートルと思われる。修の妻の百合子^{ユリコ}にちがいない。学はしばらく、その歌声を毛布の外に追いやろうとして、頭からすっぱりかぶったが、声は依然として、眠ろうとしている意識を刺戟しつづけるのだった。

雨戸を閉めなければ、やがて朝日もさしこむことだし、眠れる訳がないと、学はベッドの上に起き直って、曇りガラスの窓を開いた。この窓は雨戸を入れると三重窓になっている。最初は曇りガラスの戸と雨戸だけだったのに、冷房機を入れた時に、窓をしめたまま、庭が見られるようにと、透明なガラス戸をつけ加えたのだ。

歌声はすぐそばに聞こえるのに、百合子の姿は見えなかった。枯れた芝と、花壇の菊やダリヤが学の目にはいった。

突然、四角い窓の下から百合子の頭が現われて、そのままダリヤの花壇の方へ歩いていった。彼女の歌は二三メー

トルどころか、直線距離にすれば、一メートルもない所から聞こえていたのだ。彼女は学の窓下のコスモスを眺めていたにちがいない。泥がついたのか、両手をパラッと開いて、スカートにふれないようにしている。

百合子は学の窓の方を見もしない。最初見た時に、曇りガラスの戸がしまっていたので、いまでもそのまま、部屋の中には誰もいないと思っているにちがいない。学は曇りガラスの方を閉めないなら、大声で挨拶した方がいいと思った。見られていない、と信じきっている人が見えるのは、それだけで、人の秘事を犯しているような気がする。

しかし学は寝起きなのだし、もう一度、眠ろうとしているのだ。人に挨拶するような状態ではない。そして、雨戸をしめようとして曇りガラスの戸を開けたのだから、その目的を達せずに閉めてしまうのは、逆に百合子から、自分の当然の権利を犯されるような気がする。学はしばらく不機嫌な顔で、じっと百合子を眺めていた。

突然、彼女は深く腰を曲げた。菊の茎に何か異常を見つけたらしい。近ごろのスカートは短い上に、百合子は特にそういうのを好むから、真後ろにいる学からは彼女の脚が三分の二ほど見える。今、ふりむかれては、大変に具合

が悪い。学はあわててガラス戸を閉めた。勢いよく閉めすぎたために、引き戸はパチンと柱にぶつかってはねかえり、一センチほど開いてしまった。戸と柱のふつかる音は、百合子の耳にもとどいたらしい。げげんな顔をしてふりかえり、一瞬、学は百合子と視線が合った、と思った。

しかし彼女の顔は何の表情も見せずに、目は別な方向に向けられた。彼女は一センチの戸の開きに気づかなかったのだ。やがて、彼は元の姿勢にもどった。学は、枕を脇にかかえるような横向きの姿勢になった。そうするとせまいすき間から、百合子がよく見えるのだ。彼女がガラス戸がすこし開いていることに気づいたところで、彼の部屋は、ほかの雨戸が全部しまっているから、暗くて何も見えないであろう。

そうやって、弟の妻をのぞいていることがやましくなくともなかった。しかし雨戸を閉めたいという目的を妨害されたという不満がある。それにのぞきたくなるほど美的な体ではないから、見たって悪くないという気がするのであつた。

百合子はちよつとO脚の気味があつた。ポツタリ肉のついた腿が二本、太い指のように並んでいて、膝と膝の間は

雑誌がはさめるくらいしている。そしてふくらはぎの肉が脚の外側からはりつけたように並んでいて、それが次第に細くなるあたりでは一点に集るような感じに、左右の踵がピタッと合っている。学が今正面に見ているのは、膝の裏側の部分だった。日に当たらないために生白く、のつぺりと平らで、青い血管が何本か見える。形も色もあまりにも無防備で、つい先刻まで、そこに何かがはりついていたのを、むりやりにはがして、はじめて外気にさらされた、という感じがする。

百合子の脚を見ている学の心が、必ずしもエロティックなものでない証拠に、彼の心に嘲りに似た気持はおこつても、欲望のたかぶりは感じられなかった。彼はテーブルの下段にある小型の双眼鏡をとった。元々、これは庭に来る野鳥を観察するためのものだったが、そこに修が家を建ててからは、使うこともあまりなくなった物である。

はじめ、カラー色と浅みどりと、あせた紅がらの縦縞の布地が見えた。ウールらしいが、まるで粗い木綿地のように見える。裾にいつ付いたのか、つぶれて乾ききった飯粒がへばりついている。ほとんど一メートルと離れない所で見える近さだった。

腿には毛は一本もないが、それでも毛穴は一つ一つ小さく隆起している。鮫肌サメ肌というのはこのことだろうか、と学は考えた。その隆起は日にさらされることのすくないところでは少しずつ赤らんで、膝の裏あたりでは、バラ色の発疹のようにも見える。しかし毛穴の隆起はふくらはぎより下になると、急激にすくなくなり、すべすべした小麦色の肌になっている。

学は自分がいくらかの優越感をおぼえるだけで、劣情がおきないのを、むしろ誇らしく思った。医者が仕事に打ちこんでいる時、きつと今の自分のような気持で、患者の体を眺めるにちがいないと思った。双眼鏡の視野の百合子が急に動いて、見えなくなったので、学は肉眼で戸のすき間を眺めた。彼女は花壇にそって歩いている。そして今、学に横顔を見せてしゃがみこんだ。そういう姿勢になると、彼女の肉体の欠点がほとんどかくれてしまい、背中、尻、腿の作る線がひどく肉感的になった。

学は双眼鏡をテーブルにもどし、昨夜、読みかけていた本をとりあげた。今日の朝までに、二枚の書評を書かなければならない。そして肉感的に見えた百合子のイメージを頭から追放しようとした。彼女を意地悪く眺めている限り

では、たとえのぞき見であろうとも、不道德とは思えないのだが、彼女に性を意識することは、不倫なのだ。百合子は弟の嫁なのだ。

彼の目はページの活字を追っていたが、頭の後ろの方では、百合子のこと、というよりも、不倫のことをなおも考えつづけていた。

百合子と会ったのは、修が結婚する一年ほど前だった。

彼女の脚を見たことが、学にその時のことを思い出させる。初夏のころだったと思う。スリットのはいつたスカートの流行した年で、お尻がスポッとはいるような学の家ソファにすわった百合子はしきりにスリットとその下に顔をのぞかせているクリーム色の下着を気にしていた。

彼女が氣にするから、学もつい氣になった。弟の恋人なのだから、そんなことを氣にしていけないと思っても、紅茶のカップをおいた手を、すぐそちらに持っていくので、学の視線もつい、手の動きについて、そのあたりまで行ってしまふのだ。

百合子が帰った後で、学の妻の季子は、

「露出狂みたいな人ね。すきとおりそうなブラウスなんか着て。」

「そうだったかな。」

学はぼんやり答えた。そう言えば、ブラウスの下に、くつきり下着が見えたような氣もするのだが、彼の記憶に残っているのは、スリットばかりだった。きつと自分はそのばかり見ていたにちがいない、と思うと、学は自己嫌惡にとらわれた。今ごろ、修は百合子に言っているにちがいない。

「どう思う、兄貴を。」

「そうね、いい方そうね。知的で……。でも、ちょっとね……。」

「ちょっと？」

「ええ、ちょっと。」

「ちょっと、何だい。」

「何でもない。」

彼女は学を痴漢だと言いたいのを、おし殺そうとする。

「言えよ！」

「ううん。何でもない。木俣家は弟の方がいいわよ。」

修はきつと顔を赤らめて答える。

「可哀そうに。あれで評論家としては、有望らしいぜ。」

「そうでしょうね。でも、お兄さまって方、じつと見てい

るだけで、行動する方じゃないわね。」

この会話は、学が組みたてた架空のものではあったが、まるでテープレコーダーに吹きこんだように、学がくりかえし心の中で聞く会話だった。見るだけで、手を出さない、という百合子の言葉は、学自身の自己批判なのだが、まるで彼女自身から言われたように、この言葉を思い出すと、カッと耳が熱くなった。一面ではそれはスリットばかり見ている自分を責める言葉ではあるが、またそれは、自分の生活態度に対する反省でもあった。

結局、彼は評論家としても、逃げ腰の半端^{はんぱ}仕事しかしてないから、軽評論家などといわれる。いやエッセイストという肩書がつくことが多い。浮気をするのだった、お粗末なバーの女と、まるで遊園地でジェット・コースターにのるような遊びしかしないのだった。その時のスリルがどんなに本物に見えようと、所詮、それは入場料をはらったの上であり、重力を利用した安全なスリルなのだった。

気のせいかな、百合子は、決して学に打ちとけなかった。話しかけても、ハッと目を見はって、驚いたような表情をし、それからいいえで、よそよそしい答え方をするの

だ。たまに修の家でお茶など御馳走になる時、学が、

「もう一杯。」

というとき、修は、

「おい、ユリ、兄さんにお茶。」

というものの、自分で学の茶碗を持って立ち上り、台所で百合子に入れさせ、また自分で持ってくるのだった。それは兄に対する敬愛の気持から、妻にさせるよりも、自分から立とうとしていることはわかるのだが、学は弟もまた百合子と自分の間をへだてようとしているのだ、と疑ってみたくなることもあるのだった。

学が結婚したころ、修はまだ学生だった。戦争の混乱がやっと収まりかかったころだったから、学夫婦も修も、両親の家に同居していた。学が外出から帰してみると、もう深夜なのに、修が季子と一緒にこたつにはいつて映画や恋愛の話をしていることがよくあった。修は熱心に、「こういう場合、女の人はどうなのかなあ……。」と、かなりきわどいことを、季子にたずね、彼女の方も、

「そうねえ、人によってちがうけれど、あたしの友達で、こんなことを言った人がいたわ、……。」

というように真面目に答えてやっていた。

そして季子の関心が帰ってきた学の方にむいてしまうと、修はつまらなそうに、あくびをしながら立ち上り、

「おやすみ。」

といって、自分の部屋に引きあげるのだった。いや、それはばかりでなく、新しいダンスのステップをおぼえたといつて、修と季子と抱きあって踊っていたこともある。

だからといって、修と季子が怪しかったとは、学は一度も考えたことはなかった。二人が親しそうなのは、殊に一緒に踊っているのは、不愉快でないことはなかったが、学は微笑して、そういう二人を見ることにしていた。学たち兄弟の家には、女気おんなげというとお手伝い以外になかった。季子は修にとつて、姉でもあり、ガールフレンドでもあった。ほかのガールフレンドに対しては、バカにされるのが恐ろしいあまり、口に出せないようなことでも、兄嫁なら言えるのだ。

若いころの修の性の妄想の中に、季子が、時には学自身と共に登場したことであろう。しかしそれは仕方がないこと、というよりも、それが昔からの学と修の関係だったのだ。

学が中学にはいった時、修はどんなに腕時計や万年筆をうらやましがったことだろう。修は学の目を盗んで、そういう物をいたずらしたかったし、それが兄弟喧嘩の主なテーマの一つであつた。

そして修が大きくなって、腕時計を買ってもらえるようになる時、学の腕時計はもう古びて傷だらけになっている。学はその傷の一部は修に責任があるのだから、どうせ新調するなら、新しいのを自分が取つて、古いのは修があれほど憧れていた物だから、彼にやればいいと、ずるい計算をする。

しかしその時になると、修はもう学の時計には何の関心も持たない。彼は新しい時計を手に入れて、それを大切に使う。そして兄にもさわらせまいとする。そして学自身、そのころになると、時計など珍しくも何ともない。

ただ弟のくせに、新しいのを買ってもらったのが癪いらぬであり、また何年か前に、自分の時計をいじられたのを思い出して、

「おい、ちよつと見せろ。」

と手を出すことから、喧嘩がはじまった。勿論、腕時計と妻はちがう。女性問題に対しては兄も弟も偽善的な

る。だから季子や百合子のもので、二人は争ったことはない。しかし要するに同じことなのだ。

学はぼんやり考えごとをしながら本を読み終えた。昨夜半分ほど読んだ時に、大体の見当はついていて、あとは重大な読みちがえがないかどうか、確認するためだった。とにかく書評をするために読むとなると、本の面白さは半減する。しかし彼は読み終っても、しばらくページをくついていた。原稿を書く時のキーになりそうな文章をいくつか見つけておいたのを、再検討していたのだ。手を使う仕事になるとかえって、百合子や修のことを忘れて、手にしている本に気持ちを集中できた。

かすかに襖の開く音がして、というよりも部屋の中の光が強くなって、

「起きてらしたの。」

という季子の声がした。彼女は時々、というよりも、学が仕事をしている時、殊にそばに人がいない場合は、丁寧な言葉を使う。多分、そういう学が、彼女の考える夫の理想像に一番近いからであろう。

「ああ。修が木戸をボタンとさせたもんで。」

「困るわね。車を入れる場所としては、母屋おみやの門しかないから、ここを通るんだけど、ちょっと、傍若無人にすぎるわよ。この辺はどっちかというと、家の庭なんだから。」

母屋というのは、学と修の両親の家で、二人はその庭に、小さな家を建てたのだ。二人の父はいくらか教祖的な教育者で、以前、中学校の校長をしていた。そして月に一度、全教員を集めて、泊りこみの会議をする趣味があった。そのための下宿屋のような建物が敷地の大半をしめた。木俣家の家そのものは、その建物の付属建築物のように小さく片隅に遠慮していた。

学たちの父は戦後追放になり、学校の実際面から手を引き、焼け残った大きな会議場は、あと米軍用キャバレーが女給宿舎用に買い取り、解体して持っていった。その跡の空地はしばらく野菜畑になっていたが、やがて学が、次に修が家を建てた。敷地はタツプリあったが、計画的ではなかったから、三軒の家には境界などない。それは学と修、そして二人の両親にとっては、別にどうということもなくとも、季子や百合子にとっては、ことごとくに、ひっかかる問題であった。季子が、「どっちかというと、ウチの庭」

というのは、あくまでも季子の主観にすぎない。修の家ができるまでは、そこを、学の家が自分の庭と考えてきたことは確かだが、それは所有権と結びつくものではない。そして百合子が庭を完全に共同の物と考えても、それはそれなりに正しかった。

学は、庭の問題にかかわりたくなかった。

「今度、植木屋が来たら、木戸のぶつかる部分に、ゴムでもはってもらおう。やたらにいい音がするんだ、コーンと、鹿追いみたいに。」

「鹿追い？」

「うん。京都なんかにあるじゃないか。寛から、シーソーみたいにおかれた竹筒に水がはいって、一杯になると、筒がクルッとひっくりかえる。そのはずみに下の石にぶつかって、コーンと音をたてる……。」

二人は新婚旅行に、京都から大和地方にかけて、十日ばかり旅行した。へんびな土地が多くて、ろくな旅館はなかったが、それだけに、経済的だったし、気楽な旅だった。季子は首をかしげて、十五年近く前のその旅を思い出そうとしている様子だった。やがて季子は雨戸を次々に開けはじめた。するとじつと百合子を双眼鏡のぞいていた時

の、陰気な空気が外気によって吹き払われてしまった。季子はいって来た時、この書斎兼寝室は彼の体臭がムッと立ちこめていたにちがいないと学は思った。

「何かあがる？」

「ああ、パンとコーヒーくらい。」

「あたしも、コーヒーだけおつきあいしようかな。」

顔を洗いに行く時、隣の部屋を通った。元来は夫婦の寝室だったのに、今は季子と娘の香織が寝ている。娘の床はあげられていたが、季子の夜具だけはまだ残っていた。

それは朝の忙しさに、片付けそこなったというのではなく、新しく取りなおしたように、キッチンとなっていた。季子は香織を学校に出した後、学がこの寝室に来るのを待っていた、というより予想していたのかもしれない、と思った。そんなつもりで、季子が夜具を見苦しくなくて、台所で食器を洗ったりしている間、学は双眼鏡で百合子を見ていたことになる。

いや、そういう風に気を廻すのも、百合子の間接的な影響で、季子はただ、片付けるひまのなかった夜具を、すこしでも見苦しくないようにしただけなのかもしれない。しかしその場合でも、見苦しくないように、という心遣いの

中に、学のことがいづらかは関係しているのではないだろうか。

季子はその種の期待を顔色にも出さなければ、聞かれても、決して認めなかった。彼女がくりかえし言うことによると、学が働きかけない限り、それは彼女の体の深部で眠っていて、決して勝手に動き出すことはないのだった。しかし、学が顔を洗って、書斎にもどった時、季子が台所でコーヒーをわかしているらしいにおいがただよってきたが、彼女の夜具は、もう片付けられていた。

新婚のころは女らしい恥じらいやつつしみと思えたものが、その後一向になくならないのを見ると、季子は学に対して、一種の分けへだてをしている、と考えることがある。たとえば、この夏、夜仕事をしていて、手洗いに رفتついでに、電燈がついていた季子の寝室にはいったことがある。別に用はなかった。本を読んでいるのなら、何を讀んでいるんだ、と聞いたかもしれない。また季子が、

「何か冷たいものでも、……」

と言え、
「そうだな、カルピスでもコーラでもあれば。」
と答えるつもりだった。

季子はスタンドの明りで雑誌を読んでいた。その隣りに、香織が斜めになって眠っている。暑いのか、膝まであるナイト・ガウンがたくしあがって、下半身が丸出しだった。普段は子供っぽい顔しか見ていなかったが、いつの間にか、腿もたくましくなっているし、白いパンティにつつまれた部分も豊かだった。あと何年かすると、香織も学がはじめて会った時の季子のようになるのだろうか。

その時、季子が掛布団がわりに使っているタオルを香織の下半身にかけてやった。それは子供の寝冷えを心配する母親の動作でしかなかったにしても、とにかく学の視線をさえぎるような結果となった。さりげなくは見せていても、自分の娘を雄の目から守る母親の心理が動いていたかもしれない。学は季子の枕元にしゃがんで、

「何を読んでいるんだ。」

「ベトナムの記事よ。」

学が季子のそばに寝ころがって、雑誌をとりあげると、季子は起きあがって、浴衣の胸をあわせなおして、香織の方をうかがった。それは娘が起きることを心配するということよりも、学に娘のことを思い出させるためらしかった。彼女は結婚前から、彼女の適当と思う以上に学が情熱的な